

君のためなら千回でも

2007(平成19)年12月27日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督=マーク・フォスター/原作=カーレド・ホッセイニ『カイト・ランナー』(アーティストハウスパブリッシャーズ)/出演=ハリド・アブダラ/ホマユーン・エルシャディ/ゼキリア・エブラヒミ/アフマド・ハーン・マフムードザダ/ショーン・トープ/アリ・ダネシュ・バクティアリ/アトッサ・レオーニ(角川映画、角川映画エンタテインメント配給/2007年アメリカ映画/129分)

……アフガニスタンからアメリカに亡命した作家のベストセラー小説が、アメリカ映画として登場したことにビックリ！ さすがアメリカの、そしてマーク・フォスター監督の懐は深い……？ 1970年代の平和な時代のカブールで培われた少年同士の心の絆は、2000年の今一体どこに……？ そして、作家生活をスタートさせた主人公が再びアフガニスタンを訪れるのは、一体何のため……？ 人間の心の絆と温かさをしっかりとみつめた、近時のハリウッド映画には珍しい名作に拍手！



原作と作者に注目！

この映画は、アフガニスタンの首都カブールで1965年に生まれ、1980年にアメリカに亡命したカーレド・ホッセイニが2003年に発表した『君のためなら千回でも(原題：The Kite Runner)』を映画化したもの。カーレド・ホッセイニはアメリカの大学を卒業後、医療に従事していたが、アフガニスタンに住んでいた少年の頃から大好きだった物書きで大成功したという珍しい人物だ。



カイト・ランナーとは……？

このカーレド・ホッセイニの自叙伝的小説である原題『The Kite Runner』を理解するためには、プレスシートにある八尾師誠氏の「アフガニスタンの文化と民族」を読んで、アフガニスタンの都市部の住民に親しまれてきた凧揚げ競技を理解する必要がある。これは、単に凧を揚げることを目的とするのではなく、互いに競い合い、相手

の凧糸を切り墜落させる競技。そこには、糸を切られ行方も定かではない凧を追いかけ見つけ出すというカイト・ランナーが重要な役割を果たすわけだ。したがって、カイト・ランナーには熟練と勘が要求され、それゆえ、大変な尊敬と称賛を得るらしい。

作者自身の投影であるパシュトゥーン人の主人公アミール（ゼキリア・エブラヒミ）と、その親友であり召使でもあるハザーラ人のハッサン（アフマド・ハーン・マフムードザダ）はこの凧揚げペアであり、ハッサンは優秀なカイト・ランナーというわけだ。ちなみにこの映画の邦題は、映画の中で交わされる会話をそのままタイトルにしてきたものだが、さて、その言葉の意味は……？

アメリカの懐の深さを実感！

2001年10月7日に始まったアフガン戦争は、2001年9月11日の同時多発テロを契機として起きたものだから、多くのアメリカ人はアフガニスタンを「につっき敵国」と思っているはず。しかし、もともと多民族国家であり多種多様な価値観が混在する国アメリカは、あらゆる国を受け入れることに寛容で、その意味では懐が深い国。もっとも、それはあくまで形の上だけで、実質的には大きな差別があるのが実態だが、それでもどこかの島国のように、外国人に偏狭な国でないことはたしか。

マーク・フォスター監督は両刀使い……

邦画が安易なテレビドラマやケータイ小説にネタを求めているように、ハリウッド映画でもアメコミ人気作などの映画化が目立つ中、マーク・フォスター監督がこんな敵性国家(?)からの移民が書いたベストセラー小説に目をつけ映画化したというのは、それだけでもすごいこと。マーク・フォスター監督は、『チョコレート』(01年)と『ネバーランド』(04年)のように、社会的な問題提起作と超娯楽作の両刀使いができる監督。最近でも『主人公は僕だった』(06年)に続き、次回作はダニエル・クレイグ主演の『007』シリーズ最新作に挑むとのことだから、こんな娯楽作品とこの映画のような問題提起作を同時並行的に監督していることになる。

ブット元首相暗殺の背景を学ぶためにも……

仕事納めとなる2007年12月28日の朝刊のトップは、パキスタンのブット元首相の暗殺という血生臭い記事が躍ったが、この映画にはそんなパキスタンの姿も登場する。

この映画はアフガニスタン映画でもパキスタン映画でもなく、アメリカ映画であることを十分認識したうえ、イラク給油新法の国会での成否が大問題となっている今、私たち日本人も日本の国際的貢献がどうあるべきかを考えながら、こんな映画を観る必要があるのでは……？ そうすれば、ブット元首相暗殺の背景も学ぶことができるはず。

パシュトゥーン人とハザーラ人の優劣関係は……？

日本は単一民族国家だが、世界は多民族国家が多いうえ、民族間の「優劣」があるから大変。私はこの映画を観てはじめて知ったのは、アフガニスタンはパシュトゥーン人の国だという意識が強いということ。これは、「アフガニスタンに18世紀半ば以来君臨してきたドラーネー朝がパシュトゥーン人の王朝であり、1973年に王族出身のダーウードがクーデタで王家を廃絶するまでの二百数十年間に亘って続いた」ため。これに対して、ババの召使の子供であるハッサンはハザーラ人だが、ハザーラ人はパシュトゥーン人から抑圧された民族らしい。そこらあたりの詳しいことは、前述の八尾師氏の解説を参照してもらいたい。それを前提にしなければ、アミールとハッサンとの完璧な主従関係が理解できないはず。

原作者カーレド・ホッセイニは、父親が外交官だったため1976年から4年間父親の赴任先のパリで過ごしたとのこと。また、映画の中でみるババのお屋敷やたくさんの召使から「ご主人様」と敬われている姿をみると、パシュトゥーン人とハザーラ人との優劣関係がきわめて強いことがわかる。

少年時代の心の葛藤 その1——父親との間では……？

アフガニスタンにソ連が侵攻したのは1979年。この映画を観ていると、それ以前の1970年代のアフガニスタンは平和な国だったことがよくわかる。だってアミールやハッサンが観ている映画は『荒野の七人』（60年）、またアミールの誕生日パーティーで流れる曲はアメリカのアップテンポな曲がいっぱいなから。

アミールの母親は出産と同時に死亡したため、アミールは厳格な父ババ（ホマユーン・エルシャディ）の下で育てられていたが、アミールとババとの距離感はかなり微妙そう。それは、アミールが母親を自分のせいで死なせてしまったという負い目を持ち、そのため父親から愛されたいと願う反面、疎まれているのではないかという不安

をもっているため……？ アミールがモノを書くのが好きなのは、ババの友人ラヒム・ハーン（ショーン・トープ）のおかげ。繊細なアミールの心を理解し、彼の書く小説（？）を誉めてくれるのがラヒム・ハーンだったが……。

少年時代の心の葛藤 その2——ハッサンとの間では……？

凧揚げのパートナーであるとともに無二の親友であり、かつ忠実な召使でもあるハッサンにアミールは何の不满もないのだが、忠実すぎるのが唯一の不满……？ そんな少年時代の微妙な心の葛藤の中、冬休みの凧揚げ大会で優勝した日、ハッサンの身にある事件が起きたが、これは少年たちの間にも人種対立が明確に存在することを示すもの。

それだけならまだよかったのだが、ある日「悪魔の心」に陥ってしまったアミールは、ハッサンに対して窃盗の濡れ衣をかけることに成功……？ しかも、そこでハッサンはババからの質問に対し、あっさりとそれを自認。さて、そのココロは……？ さて、そこから生じた心の傷は……？

そんな微妙な心理を、さすが少年時代から小説を書いていたカーレド・ホッセイニは見事に描いている。しかし、そんな状態で別れてしまったアミールとハッサンは、アミールがアフガニスタンからアメリカに亡命してしまった今、再び出会うことができるのだろうか……？

ハッサンからの電話は何を……？

この映画は、原作者のカーレド・ホッセイニにとって生涯忘れられない瞬間からスタートする。すなわち、小説家にとってはじめて本となったデビュー作を手にする瞬間は、生きていて良かったと実感する至福の瞬間だが、まさに映画の冒頭はそれ。1980年にアメリカに亡命してから20年、2000年の今父親ババは失ったものの、アミールは妻ソラヤ（アトッサ・レオーニ）と結婚し、サンフランシスコで幸せな作家生活をスタートさせたところだった。

ところが、そこで鳴った1本の電話はあのラヒム・ハーンからのもの。彼は今アフガニスタンを逃れてパキスタンにいるとのことだが、どうしてもアミールにパキスタンに出かけてきてほしい、いや出かけてくるべきだと主張。恩人ラヒム・ハーンが病床にあることを知ったアミールは、出版ツアーなどの予定をキャンセルし、直ちにパ



『君のためなら千回でも』2008年2月23日（土）、梅田ガーデンシネマ／なんばパークスシネマ／京都シネマ／シネカノン神戸 他に全国順次ロードショー。
©2007 DreamWorks LLC and Kite Runner Holdings, LLC. All Rights Reserved.

キスタンへ飛ぶ決心をしたのだが、ラヒム・ハーンはアミールに一体何を求めているのだろうか……？

ネタばらしは到底ムリ

パキスタンでラヒム・ハーンと出会ったアミールが見せられたのは、あのハッサンからの手紙とハッサンが息子ソーラブ（アリ・ダネシュ・バクティアリ）と一緒に写っている1枚の写真。そこにはハッサンのアミールに対する永遠に変わらない忠実な気持ちが綴られていたが、それとともにラヒム・ハーンから聞かされたのはある驚愕すべき事実。ここでネタばらしするわけにはいかないから、それは是非映画で。

ここから始まる、ハッサンの息子ソーラブを捜し出し、連れ戻すためのアミールのアフガニスタンへの旅がこの映画後半のテーマ。それについては、是非あなたの目でしっかりとその顛末を確認し、かつ味わってもらいたいものだ。

日本人はこういう映画で勉強を……

20年前のパキスタンからアフガニスタンへの脱出が大変だったのと同じように、

2000年の今、パキスタンからアフガニスタンに入国するのは大変。今やすっかり有名となった(?) タリバンの武装兵士たちが、どんな風にあふガニスタンを支配しているのかが実によくわかる。ちなみに、この時代アフガニスタンでは男はひげをはやしていなければ大変なことになったらしく、アミールがつけひげをつけて入国したのはちょっとマンガ的……？ それはともかく、日本人はこんな映画から9・11同時多発テロ直前の、2000年当時のパキスタンとアフガニスタン情勢を勉強する必要がある。

撮影はどこで……？

ところで、この映画は2007年のアメリカ映画だが、この映画の撮影場所はアフガニスタン……？ いやいや、いくら約2年間の暫定政権を経て2004年12月にはカルザイが正式に大統領に就任したとしても、さすがにそれは怖い……？

プレスシートによると、この映画では「1970年代の活気あふれるカブールと、タリバン支配のために荒廃した2000年のカブールを撮影したのは新疆ウイグル地区の古都カシュガルとタシュクルガン」とのこと。さすがの私も、生命の危険のあるアフガニスタンの首都カブールに行きたいとは思わないが、たとえ偽装だとしても、この映画ではあの時代、この時代のカブールの雰囲気をタップリと味わうことができるはず……。

2007(平成19)年12月28日記